

証言の響きを取り戻す

藤原導夫

目次

はじめに

1. 顔を上げない聴衆
2. 死ぬほど正確で退屈な説教
3. 説教そのものについての問い

I. 説教の言葉の証言性

1. 聖書に見る説教の証言性
2. 証言なさるキリスト
3. 証言するペテロ
4. 証言するパウロ

II. 説明と証言との相違

1. 「教える説教」に潜む落とし穴
2. 「説明」から「証言」へ
3. 「私」と「私たち」を説教する

III. 「適用」を問う

1. 「適用」から「証言」へ
2. 現臨のキリストとその恵みを

むすび

はじめに

この論考は神学の諸分野からすれば実践神学に関わるものである。キリスト教会における幅広いさまざまな実践を理論的、方法論的に扱おうとするのが実践神学であるが、ここでは説教における実際問題を取り上げることから考察を進めてみたい。具体的には、筆者自身が仕えている教会で説教する時に直面する問題を手がかりにし、そこに横たわっていると思われる背景や問題に光をあてながら、いかにすべきかを模索してみたいと思う¹。

1. 顔を上げない聴衆

しばしば説教をしながら困惑してしまうことがある。聖書テキストの釈義がなされている時には聴衆はさほどの関心も見せないようで、その内容が今日の話題に移ると、むしろそこに強い関心を覚えているかのような態度を示すことについてである。聖書の釈義をしている時にはうつむくような姿勢をとっておりながら、今ここにおける日常茶飯の話などに移ると、興味深そうに顔を上げて耳を傾けようとするのである。同じひとまとまりの説教であるはずなのに、その内容に関しては、興味を覚える部分とそうでない部分があるように見えるのである。

このような聴衆の微妙で不思議な反応は、どうも筆者の教会のみに限らないように思われる。なぜなら似たようなケースを他の説教者からもしばしば異口同音に聞くからである。

この聴衆の態度はいったい何を意味し、何を訴えているのであろうか。それは、聞き手から説教者と説教に対するある種の「意義申し立て」なのかもしれない。そのように聴衆が無言のうちに訴えかけてくるクレームに注目し、その意味するところは何か、そのような聴衆の反応をどのように理解し、

¹ この論考は2011年10月31日～11月2日、東京にある中央聖書神学校で開催された日本福音主義神学会・第13回全国研究会議、テーマ：「説教、コミュニケーション&トランスフォーメーション」において発題したものに多少の修正加筆を施したものである。

どのように向き合って応えていけばよいのであろうかということ、真剣に考えてみたいと思うのである。

2. 死ぬほど正確で退屈な説教

説教学者クリスティアン・メラーはドイツにおける昨今の説教事情を次のように描写している。「弁証法神学が、テキストを読む講解説教に集中したことが、特に第三帝国に生きた福音主義教会を、多くの過った教えから守ってくれた。もしそうでなかったら、教会は、現代の人間に媚びを売る自由神学もろともに、この誤謬に落ち込んでしまったかもしれないのである。だが自由陣営に打ち勝ち、ファシズムのイデオロギーを斥けるのに、まことに適切な説教の武器であったものが、戦後になって、だんだんその弱点をあらわにしてきた。〈清潔な釈義〉を伴う純粋な講解説教は、死ぬほど正確であるが、死ぬほど退屈でもある説教を、広範囲に呼び起こすことになったのであり、その説教によっては、自分の助けを求める叫びをあげる教会共同体が姿をあらわすことは、もはやなかったのである」²。

これはドイツの教会における説教事情であるかもしれないが、ここ日本においても似たようなことが起こっているということはないであろうか。確かに日本でも多くの教会で講解説教がなされているようであるが、説教学者・加藤常昭はそこにおける説教について次のような観察を述べている。「今日の日本のプロテスタント教会の大勢は、講解説教こそ説教の本来のあり方であると考えているように思われる。講解説教でない聖書に即さないということになり、非聖書的ときめつけられることを恐れる傾向もあるほどである」³。

しかし、その観察に続き、加藤はこのような日本の教会において講解説教が正しくなされているかということ、を次のように問うのである。「説教者が、これこそ講解説教の正しいあり方として聖書テキストに固執すればするほど、聴衆は、その説教にへだたりを感じてしまうことがいくらかある。聖書的であるということは観念的であることを意味するかのよう誤った観念が、こうした説

² クリスティアン・メラー『慰めの共同体・教会』加藤常昭訳、教文館、2001年、第二刷、179頁

³ 加藤常昭『説教論』日本基督教団出版局、1993年、380-381頁

教者によって植えつけられてしまうこともあるのである。聖書の話は退屈だという不幸な体験を重ねてしまっている信徒が少ないとは言えない現実に、われわれ説教者は責任があるのである⁴。

説教者は、釈義に力を注ぎ聖書に忠実に即した説教を試みようとする。しかしそこにおいて生じる結果がしばしば「死ぬほど正確であるが、死ぬほど退屈でもある」とか「聖書テキストに固執すればするほど、聴衆は、その説教にへだたりを感じてしまう」というようなことがドイツでも日本でも起こっているのである。まさにこのことこそは、他人事ではなく自らの説教の現実でもあるということ筆者自らが身につまされているのである。聖書が真剣に説き明かされているにもかかわらず、そこにおいて聴衆は死ぬほど退屈してしまっている原因や理由はいったいどこにあるのであろうか。

3. 説教そのものについての問い

幼い頃から筆者が信仰を育まれたのは、体験主義的傾向の強い教会においてであった。そこにおける説教では、もちろん聖書テキストは語られるが、多くの場合、説教者自身の体験談や信徒の方々の体験談などが盛り沢山に詰め込まれているものが多かった。時には、聖書テキストから全く離れてしまったり、とりとめもない自慢話にそれていってしまうようなこともあった。

そのような説教に反発するようにして、筆者は聖書の釈義に徹底するような説教の在り方へと導かれ、それにあこがれ、理想とし、そのような説教を長年にわたって追い求め、語り続けてきたのであった。しかし、それで果たしてよかったのであろうかということ、これまでの歩みをふり返りつつ改めて問い直してみたいと思わされるようになってきているのである。

I. 説教の言葉の証言性

1. 聖書に見る説教の証言性

私たち説教者が日夜苦闘しつつ取り組み続けている「説教する」という行為

⁴ 前掲書、381頁

は、そもそもどこから由来してきているのであろうか。それは聖書に記されているイスラエルの歴史、イエス・キリストと弟子たちの歩み、初代教会の歴史、そのような世界にその源泉を見出すことができるであろう。しかし不思議なことに、日本語聖書を開いて驚かされることは、そこに「説教」という言葉はほとんどまったくと言っていいほど出てきてはいないということである。

それでも、ごくわずかに出てくるそれらを挙げれば、次の如くである。新改訳聖書では「マタイの福音書」12章41節、「ルカの福音書」11章32節のみである。新共同訳聖書では上記2カ所に加え、「テサロニケの信徒への手紙」第二・2章15節の合計3回。口語訳聖書においては「ミカ書」2章6節と11節のただ2カ所のみである。

これらのことから素朴に思われることは、聖書には全体を通じて、実際には説教するという行為が多く見られるにもかかわらず、それらの重要な行為が日本語聖書ではいわゆる「説教する」という言い方では表現されていないのではなかろうかということである。実は確かにその通りであり、説教行為を「説教する」という言葉を用いては必ずしも日本語聖書では表現してはいないのである。

ここでは、そのことについて考察するいとまはないので、簡単に触れるのみとしたい。説教行為を表すものとして新約聖書では次のような用語が使用されている。ケーリュッソー・κηρύσσω（宣べ伝える）、ユアングリゾー・εὐαγγελίζω（福音を語る）、ディダスコー・διδάσκω（教える）、パラカレオー・παρακαλέω（慰める）（励ます）（勧める）、マルチュレオー・μαρτυρέω（証言する）などである⁵。

上記用語に見られるような説教する時におけるその語り方を性格づけるさまざまな特質はそれぞれに重要であり、見落とされてはならないであろう。そのことを認めた上で、なお説教が「証言」としての特質・性格を強くもっていることに改めて注目して受け止め直すことが、私たちが生きるこの時代と社会において、今、とりわけ求められているのではなかろうかということを考えさせ

⁵ これらの詳細については次のものをご参照いただきたい。藤原導夫『キリスト教説教入門』いのちのことば社、1998年、11-20頁、また藤原導夫「説教」『聖書神学事典』いのちのことば社、2010年、480-483頁

られるのである。

2. 証言なさるキリスト

イエス・キリストは「証言する」ことに生きる存在であったということから語り、明らかにしておられる。十字架の死が迫り来る中で、ポンテオ・ピラトの尋問を受けながら、キリストは次のように答えておられる。

「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです」(ヨハネ 18:37)⁶。

キリストはこの言葉において、ご自分がお生まれになった目的、この世に来られたことの真の目的を明らかにしておられる。それは、真理について「証し」するためであった、と。実にキリストの受肉とその生涯の目的や使命は真理を「証し」するところにあったのである。

そして、キリストご自身によって語られた次の言葉を見落とすことがあってはならないであろう。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」(ヨハネ 5:39)。

「聖書とは何か」ということについてのキリストご自身による解説であり定義でもある。すなわち、聖書とは「キリストについて証言している」ものであるということである。この場合の聖書は当時としては旧約聖書を指しているが、このキリストの言葉は新約聖書にも及ぶものとして理解することがゆるされるであろう。聖書の目的や性格はキリストを「証言」するところにある。誰よりもキリストご自身がそのことを明言しておられるのである。

(新改訳聖書「ヨハネの福音書」5章39節に訳出されている「証言している」という言葉と同書18章37節に訳出されている「あかしをする」という言葉は、そこで使われている新約聖書のギリシャ語動詞原形は同じ「マルチュレオー・μαρτυρέω」である。つまり新改訳聖書ではコンテキストによって同じ原語が「証しする」あるいは「証言する」というように訳し分けられているのである。

⁶ 本論考における聖書の言葉の引用は、基本的に日本聖書刊行会による『新改訳聖書』第二版からなされている。

ちなみに、「ヨハネの福音書」5章39節の場合、口語訳聖書では「あかしをする」と訳され、新共同訳聖書では「証しをする」と訳されている。また同書18章37節の場合、口語訳聖書では「あかしをする」、新共同訳聖書では「証しをする」と訳されている。

上記三種類の日本語新約聖書とギリシャ語新約聖書を読み比べて分かることは、しばしば出てくる「μαρτυρέω」というギリシャ語は文脈によって「証しする」と訳されたり、「証言する」というように訳し分けられているということである。そこから日本語聖書においては「証しする」という言葉と「証言する」という言葉はある意味で相互交換可能なものとして読むことがゆるされているということができよう。

本小論でもしばしば「証し」と「証言」という言葉を用いることとなるが、両語を相互交換可能なものとしつつ、「証し」はより生活に密着する行為、「証言」はより語ることに関わる行為を表すものとして用いることとしたい。))

3. 証言するペテロ

キリストが担われたこの「証し・証言する」という使命は、弟子たちにも託され委ねられたのであった。復活されたキリストは弟子たちに告げられた。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」(使徒 1:8)。

やがてキリストに代わって遣わされる「聖霊」の降臨によってもたらされる出来事は、弟子たちがこの世のあらゆる地域において「キリストの証人」となるということであったのである。

そして、実際に五旬節の日に聖霊が降ると、キリストの言葉通り、弟子たちはまさにキリストの証人として証言することを始めたのであった。「使徒の働き」2章14-40節には聖霊の力と助けによってなされた初代教会初の説教が記録されている。ペテロは聖霊に満たされ、エルサレムに集まって来ていた多くの人々に向かって大胆に語りかけた。

「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を